



全国から選ばれた100人の高校生たちが、長い間自然と関わる経験を積んだ名人と一対一で触れあい、その知恵や人となりを「聞き書き」して次世代へと伝えていく取組、「聞き書き甲子園」の研修会が、8月11日～14日の4日間、東京都内で行われました。

第12回 聞き書き甲子園

「聞き書き甲子園」とは？

今年で第12回を迎える「聞き書き甲子園」は、毎年全国から100人の高校生が参加し、森や海・川に関わる様々な職種の名人を訪ね、一対一での「聞き書き」をする取組です。

平成14年に「森の聞き書き甲子園」として始まったこの取組は、その後、海・川を合わせて「聞き書き甲子園」として実施されてきました。

「聞き書き」とは、話し手の言葉を録音し、一字一句全てを書き起こした後で、ひとつの文章にまとめる手法です。話し手の語り口そのままにまとめられた文章からは、名人の人物が浮かびあがります。参加高校生はこの「聞き書き」を通して、名人の知恵や技、そして生きざまやものの考え方を丸ごと受けとめ、学びます。

「聞き書き甲子園」研修を開催、運営には卒業生が参加

研修初日の開会式では、聞き書き甲子園のドキュメンタリー映像を通して一年間の流れを紹介した後、聞き書き

甲子園の講師である塩野米松さん（作家）と阿川佐和子さん（文筆家・インタビュアー）による対談が行われました。対談の中では、プレ聞き書きをしてみよう、ということとで実際に高校生2人が壇上上がり、お互いにインタビューを実践。これに塩野さんと阿川さんがユーモラスな合いの手を入れたら、会場の笑いを誘う場面もありました。

その後、東京郊外に会場を移し、参加高校生は「聞き書き」の手法を学ぶ実習や森の体験プログラム、写真撮影講習など3泊4日の研修を受けました。この研修で参加高校生を指導するのは過去に聞き書き甲子園に参加した卒業生のスタッフ20名。聞き書き甲子園をきっかけに森林分野に進路を変更したり、農山村地域の地域づくりに関わり始めたりと、様々な分野に進んだ卒業生たちが、自身の「聞き書き」に対する想いを高校生に伝えながら、9月から始まる取材に向けた具体的なアドバイスを行っていきました。

これからのいよいよ本番。研修での学びを活かし、今年度はどんな作品が出来る上がるか、乞うご期待です。

